

殿 下 前

酒肴五種 酢鹽

盛菓子六種 已上色々以

薄樣爲皆數○

大 臣 前

酒肴四種 酢鹽

交菓子一坏 已上樣器日

酒器例器也 已上以薄

上達 部

酒肴四種 菓子 中居交

已上樣器日 春酒器例器也 已上以薄

樣爲皆數○

〔嬉遊笑覽飲食十上〕

かひしき、くだものいそぎ、源氏物語あづまや、尼君のかたよりくだものまいれり、

管のふたに紅葉つたなどをりしきて、ゆゑなからずとりませてしきたる紙に、ふつゝかに書た

るもの、くまなき月にふとみゆれば、めとめ給ふほどにくだものいそぎにぞ見えける。此は薰

が辨の方よりの歌に目をとむれば、菓に心の移るやと見ゆると、草子の地のたはぶれながら、此

俗諺ありしなるべし、又あげ巻に、あじろのひをも心よせ奉りて、色々の木の葉にかきませもて

も

あそぶ云々、是もかひしきなり、調味故實しきの別足を包むことの處、下はをしきなり、つゝみた

るはこうばいだんしがいしきの葉はなんてんちく也云々、ふるくより南天は難轉の名詮にて、

鏡の背のもやうに付、又手水鉢の旁に植る(申陽軍鑑九勝時を行ふ處に、なんてんの御水入と有などによる歟、一代女四泉州堺の

處に、湊の藤見に、大重箱に南天を敷て、赤飯山の様にして行ます。○中庖丁聞書改敷品々の事、中

略

あり、何によりて箇様に定めたる歎覺束なし、口傳と云る年葉は鳥柴成べし、調味故實に見ゆ、

も

木は何にても鳥を付たる木を云にや、饅頭のかひしきは前にいへり、改鋪といふも假字書なる

べし、古くかいのかなを用ふれど誤なるべし、かひにて飼と同意、物のあはひに插むをかひ物と

いふ是なり、くわへさすることなり。

〔枕草子三〕木は

ゆづりはのいみじうふさやかにつやめきたるはいとあをうきよげなるに、おもひかけするに、べくもあらすくきのあかうきらくしう見えたることいやしけれどもおかしけれ、なべての月ごろは、露も見えぬ物の、じはすのつごもりにしもときめきて、なき人のくひ物にもしくにや